



日本人ジョーク集と桜梅桃李



今、東京では「世界の日本人ジョーク集」がよく売れているようです。日本人ほど、世界の中で自分たちがどう見られているか、を気にする国民も少ないでしょう。しかも、相当にきつく皮肉られているのに、それを甘受している。そういう私自身もジョークは大好きで、現役の特派員時代には、内戦の煙がまだ残る中米ニカラグアなどでも、食事のおりなど、心を割った友人とよくジョークを交し合ったものでした。

ラテン・アメリカの人々は、もともとジョークが好きなのでしょうか、ちょっとした私の小咄に折りたたみかけるように辛らつな、ときに爆笑を誘う挿話を飛ばしてきました。その中には、先の著書に書かれているようなものもありました。ここでは、私が訪れた先々で最もウケた日本人についてのジョーク二つを紹介してみましょう。

その1

「ある日、大洋を航海していた船が事故で沈没してしまいました。海に放り出された乗客は、遠くに見える島に向かって泳ぎだしました。その中のたった3人だけ、島に泳ぎ着くことができたのです。男2人と女1人でした。さて、この男2人は女1人をめぐってどんな行動をとったのでしょうか」

フランス人：1人は彼女の夫になり、もう1人は彼女の愛人になりました。

イギリス人：2人は、彼女を放っておいて、自分たち2人で愛し合いを始めたのです。

イタリア人：2人は、彼女を自分が手に入れようと、決闘を始めました。

では日本人はどうしたでしょうか？

日本人：2人は、島のどこかに電話がないかとあわてて探しに出かけました。本社に電話して、上司の指示を仰ごうとしたのです。

その2

「ゴーツ いよいよ沈没しかけたタイタニック号から、男も女も我先にと救命ボートへ避難しようとした。大混乱になるうとしていた現場で、婦女子を優先させようとして船長が説得を試みます」

まずアメリカ人男性に：「キミはヒーローになりたくないか！」。

イギリス人男性に：「あなたは真性のジェントルマンだ！」。ドイツ人男性には：「君の国の法律ではそうになっているよ」。そして日本人男性には：「皆がそうしているからあなたもそうした方がいい」

前者は個人的なことまで上司に指示を仰ごうとする会社人間の性向、後者は周囲の目を気にし、突出することを恐れ、他人と同じようにしていると安心できる、という、どちらも個人としての主体性の弱さをジョークっています。

これは「ヨコナラビ文化」とも言えるものでしょう。



そんな中、「桜梅桃李」との言葉がありますね。――桜は桜、梅は梅、桃は桃、そしてスモモはスモモとして精いっぱい花を咲かせていくところに、その本来の美しさが出てくるわけです。

人間の世界も、やたら他人を羨んだり、無理な背伸びをすることなく、自分らしく生きてこそ、満足の人生が開かれていくのではないのでしょうか。「昨日の自分より今日の自分」と自らの向上をめざす中に、より充実の日々がやってくるように思うのですが・・・。

